



TITLE:

<Book Review>S. Husin Ali, Social Stratification in Kampong Bagan, A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community. (Monographs of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, I) Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, Singapore, 1964,x+170p

AUTHOR(S):

坪内, 良博

---

CITATION:

坪内, 良博. <Book Review>S. Husin Ali, Social Stratification in Kampong Bagan, A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community. (Monographs of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, I) Malaysian Branch, Royal Asiatic ...

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55096>

RIGHT:

Wang Gungwu (ed.): *Malaysia, A Survey*. New York · London, Frederick A. Praeger. 1964. 466 p.

本書は、マレーシア連邦が独立する際に、この新しい国が内蔵する諸問題を多角的に考察するという目的のもとに、マラヤ大学を中心とした26人の学者によって書かれた論文集である。

編者の Wang Gungwu 教授によれば、マレーシアという言葉には、19世紀より20世紀初頭まで頻繁に用いられたが、それは、当時、マレー半島よりインドネシア諸島東端のモルッカ諸島までの地域を含む範囲を示す言葉であった。しかし、英蘭両国の植民地支配行政が確立されるにおよび、マレーシアという言葉は、その本来の意味をほとんど失い、それが再び注目されはじめたのは、1961年に、Tunku Abdul Rahman 首相が、マラヤ連邦、シンガポール、北ボルネオを政治的に統一するマレーシア構想を打ちだしてからである。この「マレーシア」は、以前、その言葉によって示された範囲の一部しか含まないまったく新しい意味を所有した言葉であるため、この地域の多くの政治家達に、かなりの誤解と混乱をもたらしたのである。歴史的に見ても、マラヤ、シンガポール、北ボルネオは、英国の植民地であったという共通点を除けば、一つの政治的共同体として存在したことがない。その上、マレーシア連邦を形造るための歴史的、文化的土壌は、必ずしも充分に肥えてはいない。したがって、連邦設立当初に、内外から懸念された事柄は、この国が、人種、言語、宗教などをまったく異にした複数民族社会から派生する解決困難な諸問題をどのように解決するだろうかということであった。特に構成諸民族の利害と関連する政治体制と経済発展の力点の置き所、個別の民族の利害を越えた固有の民族主義の育成、国語の制定、統一された教育の方法などは、最も懸念された問題であるが、本書は、このような諸問題を自然環境、歴史、社会と文化、経済、政治の5つの角度から理解しようとしている。

この点、本書は、連邦設立直後に出版されるべく書かれているため、シンガポールが連邦より離脱した今日、連邦の将来に対する予想が、当時どのようなものであったかを知るうえにも、本書の内容は、興味深い。このような論文集に常に見られることであるが、執

筆者によって、視点が異なるため、一概にはいえないが、それでもなお本書には、意外に、連邦の将来に対する楽観論が支配的である。ボルネオの民族問題が重視されている (Tom Harrison) にしては、中国人問題では、その協調性の高い点が強調されたり (Victor Purcell) している。

全体として見れば、本書は、マレーシア連邦が直面する諸問題を理解するためには、好個の入門書であるといえるが、国内の諸地域の具体的情勢にかんする資料に乏しい。またマレーシアにかんする英語の書物に見られる共通点であるが、日本軍政の諸影響が極度に低く評価されている点は、マレーシアの現実を一層深く突込んで研究しようとする者には物足りない。

(口羽益生)

S. Husin Ali: *Social Stratification in Kampong Bagan, A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community*. (Monographs of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, I) Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, Singapore, 1964. x+170 p.

著者は、現在マラヤ大学の講師をつとめるマラヤ育ちの新進の研究者である。本書は、著者が1959年10月から60年1月にかけて、ジョホール州の村落においておこなった社会学的・人類学的調査の報告書であり、マレー人によってなされた数少ない実地調査のひとつとして、非常に貴重なものといえる。

調査地は、Batu Pahat と Muar とを結ぶ幹線道路の東側に位置し、ゴム栽培を主業とし、これに Coconut と Arecanut の栽培を加えた農業集落で、Kampong Bagan とよばれる。156のマレー人世帯と11の中国人世帯からなっているが、著者が調査したのは、この中149のマレー人世帯についてである。

著者は、まずはじめに、Kampong Bagan の人人の収入源を分析して、地主階級、中流階級 (教師・書記など)、農夫階級 (自作と小作に細分される)、労働者階級、失業者階級 (存在を指摘し、この村の成員が、経済的実力においてかなり異質的であることを示す。ついで、人格、教養、宗教上の地位、政治上の地位、職業、貧富などを判定基準として、村内において

高い社会的地位を占める者がどのようなものであるかを明らかにし、個人的な資質の重要性を認めつつも、いわゆる重要な地位を占めるものが、経済的に裕福な階級と結びついていることを示す。そして、互いに異なった階級に属するものが、社会生活の場でどのように分離されているかを観察する。

さらに著者は、このような構造をもつコミュニティで、政治的・経済的なあつれきがどのように表われているか、またどのように表面化せずにおさえられているかを、選挙、地主小作関係、生産物売買をめぐる商店と農家との関係などをめぐって述べる。

最後に、社会的・経済的地位の移動にふれて、個人的な能力を評価しつつも、村内においては、ある程度以上の土地をもった者が、その余力に応じてさらに所有地を拡大し、小規模の土地所有者がイスラム法による遺産相続による土地の細分化などを通じて転落の過程をたどること、また村外への移住者は、教育を受けたものを除けば、さらに低い地位へむかっての移動であることなどを明らかにする。

以上のような概要をもつこの報告書は、1)中国人の位置・役割が完全に無視されていること、2)階級・地位を分析する場合に親族関係にほとんど留意していないこと、3) Kampong Bagan とよばれるものが、実際にはある程度独立した2つの集落からなり、コミュニティとしての統一性をやや欠いていること、4)調査者自身がマレー人であるため、マラヤの事情に通じていないものには理解が困難な場合があること、などのために生ずる問題点もあり、また、調査自体も精密とはいえない難い箇所もあるが、マラヤのゴム栽培地域を理解するために、きわめて興味深い記述を豊富に持っている。(坪内良博)

Herbert C. Purnell: *A Colorful Colloquial, An Introduction to the Study of Spoken Northern Thai based on the Work of E. R. Hope, revised and enlarged by Herbert C. Purnell*. Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1962. vii + 100 p.

先に Thai Reference Grammar の項で述べたようにタイ語にかんして新しい言語学的方法論をもって書かれた本は非常にすくないのであるが、それも標準

タイ語以外の方言にかんするものとなると、さらにとばしいのである。本書はタイ国の北部方言の会話入門書とでもいうべきもので、チェンライ (Chiangrai) 県のメーチャン (Mae chan) 地区の方言をあつかっている。この書物の基礎をなすのは現代の記述言語学の方法であるが、その目的とするところは、言語の記述ということよりも、必要に応じてこの方言を使いこなすという実用的な点にある。従来のはっきりとした基礎のないあいまいなものではなく、はじめに述べられているルールさえはしっかり理解すれば、非常に便利な使いやすいものである。

一見したところ Haas の Spoken Thai に非常によく似ており、表記法も Haas のものに必要に応じて補足を加えたものである。まず最初の Introduction の項で、この方言の音素体系と本書で用いられる表記法について簡単にしかし要領よく説明を加えている。私自身このメーチャン地区でフィールド・ワークを行なったのでこの方言には興味を持っているのであるが、著者の解釈は正しいと思われる。ただ、この方言の声調の数を著者のいうように7つとするか、あるいは6つと考えるか、解釈の仕方によってちがいが出てくるのではないかと思う。本文は、全体を12の Units に分け、それぞれの Unit に Useful Words and Phrases, Hints on Pronunciation, Word Study といった Sections が設けられている。この点でも非常に Spoken Thai に似ており、まあいわば Spoken Thai の方言版だと思えばまちがいないだろう。ただ意味にかんする説明にややあいまいな点があるのはおしい。例えば、いずれも〈疑問〉を表わす /kə̀ə̀/、/kaa/、/bə̀ə̀/、/loo/ などについては、相互の意味的なちがいが、あるいは用法のちがいを、もう少しはっきりさせて欲しいのである。しかし、とにかく本書であつかわれている程度の会話を身につければ、現地に行ってもさし当って不便を感じることはないと思う。

こまかい点ではいろいろ考えねばならない点はあるにしても、例えばフィールド・ワークなどのためにこの方言が必要となった際などには、非常に役に立つ便利な本である。初めて習う者にとっても、わかりやすくできている。ただ、ことわっておかなければならないのは、ここであつかわれている方言は、チェンライ県の北部に位地する地区のそれであって、同じ北タイでもチェンマイやランパン (Lampang) など他の地域の言